

# 「ポストヒューマン時代」をめぐる哲学／思想的諸問題について

—「無用者階級」、「脳人間」、〈自己完結社会〉、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」などの視点を中心に—

総合人間学会 2022年度大会  
ワークショップ

上柿崇英（大阪公立大学）

22/6/26

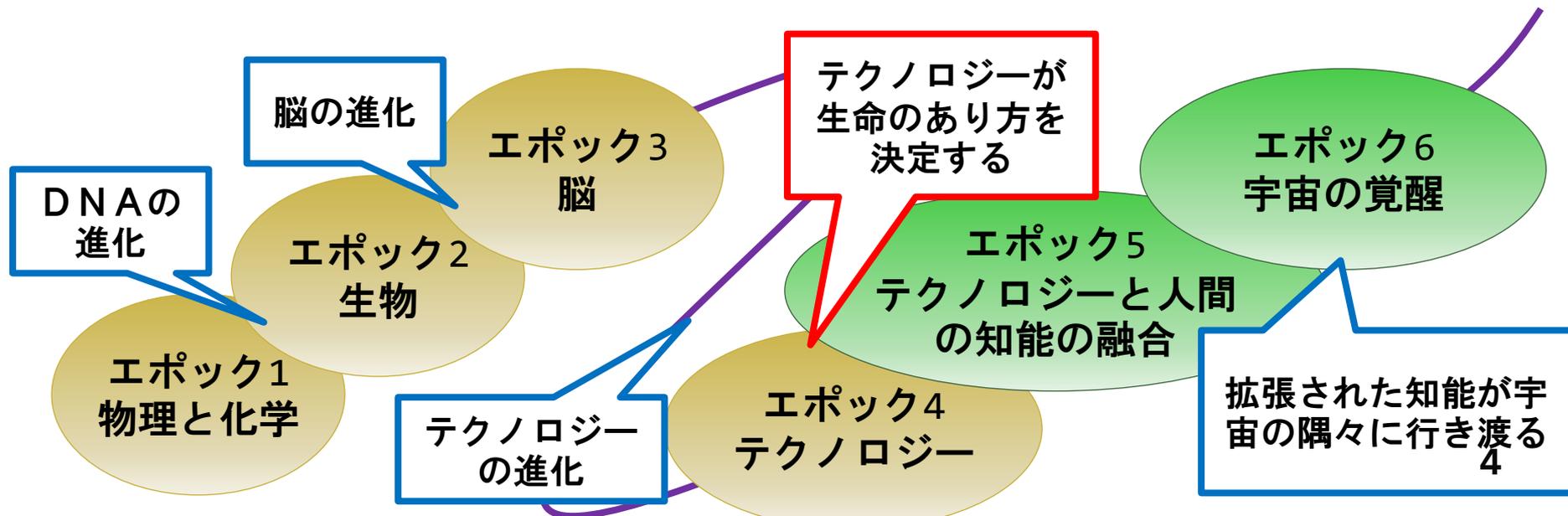
# 0. 本ワークショップの目的（問題意識）

- シンポジウムでは、われわれが、身体と機械、脳とAI、治療と人体改造の境界が曖昧となっていく時代、これまで自明とされてきた「人間」の概念が通用しなくなる「ポストヒューマン時代」に直面することについて多方面から議論を行ってきた。
- 本企画では、シンポジウムで行った問題提起をさらに発展させ、ここから浮上してくる哲学／思想的諸問題について議論を掘り下げてみたい。
  - **第一の論点：人間の未来について**  
（コメンテーター：熊坂元大（徳島大学））
  - **第二の論点：〈自己完結社会〉について**  
（コメンテーター：竹中信介（道徳科学研究所））
  - **第三の論点：〈無限の生〉の「世界観＝人間観」について**  
（コメンテーター：亀山純生（東京農工大学名誉教授））

# 1. 人間の未来について

# 1. 人間の未来について

- シングularity（特異点）の到来か？（R・カーツワイル）
  - 人間の創出する技術は指数関数的に増大し（収穫加速の法則、ムーアの法則（半導体の能力は2年以内に倍増する））、われわれはまもなく自らの存在様式が劇的に変容する「特異点」を迎える。



# 1. 人間の未来について

- シングュラリティ（特異点）の到来か？（R・カーツワイル）
  - 脳の構造／機能の全容解明（機械の移植、機械への移植）
  - 設計能力を獲得した機械（機械が機械を生み出す）
  - ナノロボット（身体の自動修復）
  - バーチャルリアリティの拡大（身体的、物理的空間の克服）

脳の

DNAの  
進化

エ

エポック1  
物理と化学

□ われわれは、近い将来、ついに生物学的な身体や脳の限界を超越する。

□ 機械と融合した知能は、惑星をも飛び越え、宇宙全土へと拡大していく。

□ シングュラリティは“進化”の一大局面である。それはおよそ2045年頃である。

エポック6  
宇宙の覚醒

拡張された知能が宇宙の隅々に行き渡る

# 1. 人間の未来について

## □ シンギュラリティ（特異点）は幻想か？（J=G・ガナシア）

- 原子の制約によりムーアの法則は行き詰まる。
- 「人間より賢いAI」といっても、それはあくまで「ある特定の問題や対象に対して人間より精度の高い判断をする」という意味であり、根本的な価値基準は人間が教えなければならない。

（例えば、「アルファ碁」は、病気を発見できるわけではない。宮崎駿風の絵を描くAIはできても、次世代の宮崎駿は勝手に生まれない。）

- 汎用型AI（強いAI）は難しく、AIが「意識」を持つことはない。ただし特定の問題や対象に特化したAI（弱いAI）は爆発的に発達する。

- 発達するのはあくまで「弱いAI」かもしれないが、それは脅威にはならないのか？

# 1. 人間の未来について

## □ 超階級社会の出現（Y・ハラリ）

- 「弱いAI」であっても、あらゆる分野で人間はAIが導く「最適解」に頼るようになっていく。（診断医、薬剤師、弁護士、教員・・・多くのサービスをAIが担当する）
- 人間は、人間にしかできない高度に創造的な活動や、アルゴリズムを管理する仕事に特化するが、それを担うのは、高度に人体改造をほどこした一部のエリート。
- 人間の大半は、やることがなくなり、人体改造の恩恵も受けることなく、アルゴリズムとエリートたちに管理されるだけの「無用者階級」となる。

□ → 超格差社会の出現

# 1. 人間の未来について

- 超階級社会の出現（Y・ハラリ）
  - ただし、“超格差社会”はひとつの可能性に過ぎない。
  - 例えばサイボーグ化やアンドロイドの所有は高価に見えるが、一般社会に普及する可能性は十分にある。  
（かつて一部の人間しか試用できなかったコンピューターは、今日スマートフォンという形で多くの人々が利用している）
  - 世の中の“標準”が変われば、健康で文化的な最低限の生活のために、それらが公的な保険や福祉の対象となる時代が来るかも？
  - それどころか、今日の富裕層が高価な自然食品やエステに精を出すように、未来の富裕層は、天然の身体を誇らしげに愉しむという時代が来るかも？

□ 未来予測は簡単にはできないが、AI、ロボット、生命操作技術は着実に発達し、われわれの生活世界に浸透していくことは確か

# 1. 人間の未来について

## □ 究極の〈自己完結社会〉としての「脳人間」の世界

- すべての必要物はドローンで自宅に届けてもらい、会社にはネットを介してアバターで出勤する。自室を一步も出ることなく、一生が完結する社会。そうすると身体を持つ必要がない。いっそ脳だけになり、直接バーチャル世界にアクセスすれば、臭い、汚い身体のメンテナンスから解放される。「意のままになる他者」を演じてくれるアンドロイドからバーチャル世界でのバーチャル人格との生活へ。すべてが「意のままになる」世界の実現。

情報システム

## □ 「脳人間」の最期

→ 「脳人間」は、最初でこそ「意のままになる生」を楽しむだろうが、おそらく早々に飽きてしまい、ついには自ら電源を切るのではないか？

→ 第一の論点に関連する「脳人間」の問題については、後半の議論を経て再び言及する。

# 1. 人間の未来について

- 「ポストヒューマン時代」は幻想か？
  - 今日の「ポストヒューマン的状況」は、インターネットの黎明期と似た状況にある。
  - 当時もインターネットが「人間らしさ」を破壊する等の批判があった。
  - ラジオ、テレビのように人々が一方的に情報によって支配されるのではなく、潜在的に誰もが情報の発信者となれる道が開け、人間社会の構造が根源的に変化すると言われていた。
  - 当時も格差社会であった。しかし実際に、社会全体としてはコミュニケーションのあり方が激変し、人間の存在のあり方が根本的に変容した。この問題は経済的な格差の問題とは別にしっかり考えておくべき問題である。

## 2. 〈自己完結社会〉という視点

## 2. 〈自己完結社会〉という視点

- 個々の技術的現実の複雑さや倫理的な問題はさまざまに論じることができる。
- しかし人間学として重要なことは、こうした「ポストヒューマンの時代」の現実が、人間存在にとして、いかなる本質的な意味を投げかけているのかということ。

## 2. 〈自己完結社会〉という視点

- われわれの社会が向かっている本質的な方向性
  - 現代科学技術の進展に伴う、加速的な 〈社会的装置（社会システム）〉 への依存
  - 現代社会においては、高度な科学技術に支えられた 〈社会的装置〉 = 「市場経済」・「行政機構」・「情報世界」 の高密度な複合体が発達し、そこから提供される“財”、“サービス”、“情報”に依存しながら生きている。



- AIやロボット等に自動制御され、人々は自ら考え行動することがなくとも、安心、安全が促進され、すべてが「持続可能」に自己調整されていく世界。
- そうしたなかで出現している 〈自己完結社会〉 という人間の存在様式

## 2. 〈自己完結社会〉という視点

- 〈自己完結社会〉の成立①
  - 〈生の自己完結化〉：
    - 〈社会的装置〉を動かすのは人間であるにもかかわらず、〈社会的装置〉への「接続」さえ維持できれば、究極的には誰とも直接的、人格的に関わらなくても生きていくことができる。
  - 〈関係の病理〉：
    - 結果的に人間は、**負担やリスクを伴う他者との関係性を維持・構築していくことが難しくなり、人々は生身の関係性それ自体を忌避するようになる。**

□ 例えばわれわれは、実際“貨幣”さえ入手できれば、必要なすべてのモノは通信販売で手に入り、多くの社会問題はどこか遠くの専門家が対処してくれる。寂しささえ我慢すれば、あとはtwitterやYouTubeで「交流」し、誰とも人格的に関わらなくても生きていけるではないか？

## 2. 〈自己完結社会〉という視点

### □ 挨拶を「禁止」にするマンション

元。みしつ付りうがいついっしつ無ごて感

が、基板を交換してくれ、気持ちがほっこることになったんです。来りします。大好きな花だけ、交換して、あつというど。(神戸・灘、主婦、72)

◆理解に苦しみます  
住んでるマンションの管理組合で、小学生の親御さんから提案がありまして、「知らない人にあいさつされたら逃げよう」と、意見が一致してしまいました。に教えているので、マンション内ではあいさつをしないように決めてください。子どもにはどの

人がマンションの人かどうかは判断できない。教育上困ります、とも。すると、年配の方から「あいさつをしてもあいさつが返ってこないのが気が悪かった。お互いによめましょう」と、意見が一致してしまいました。その告知を出すのですが、世の中変わったなど、理解に苦しんでいます。(神戸・西、自営男、56)

一生涯一度の体験  
10月末、バス2台を運

神戸新聞2016/11/04 6頁 より

- 匿名の読者投稿のため事実ではない可能性が残るが、現代社会にはこうした事態が生じていく十分すぎるほどの素地がある。

## 2. 〈自己完結社会〉という視点

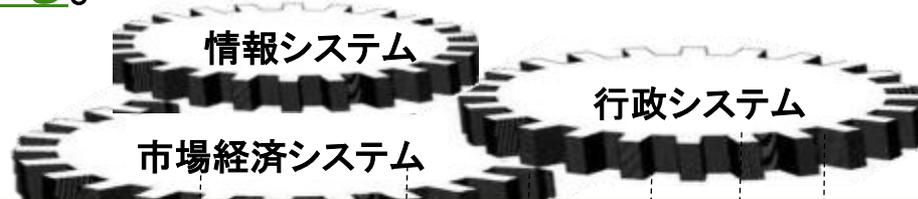
- 〈自己完結社会〉の成立①
  - 〈生の自己完結化〉：
    - 〈社会的装置〉を動かすのは人間であるにもかかわらず、〈社会的装置〉への「接続」さえ維持できれば、究極的には誰とも直接的、人格的に関わらなくても生きていくことができる。
  - 〈関係の病理〉：
    - 結果的に人間は、負担やリスクを伴う他者との関係性を維持・構築していくことが難しくなり、人々は生身の関係性それ自体を忌避するようになる。

□ インターネットが出現する以前、人々にとって「直接誰かと会って会話をする」こと自体が娯楽だった。隣近所の人間との付き合いは、いざというときに重要な意味を持つ社会関係資本だった。

□ しかし現代では、敢えてリアルな関係性を構築する必然性が感じられない。人と会うこと、会話をすること、親密になることの理由が必要。むしろ関係することでの負担やリスクの方に目が行ってしまう。

## 2. 〈自己完結社会〉という視点

- 〈自己完結社会〉の成立②
  - 〈生の脱身体化〉：
    - 生の局面において、身体に基づく必然性がなくなり、直接的／間接的「人体改造」によって、身体に由来する物事が意味を持たなくなる。
  - 〈生の混乱〉：
    - 若さと老い、男性と女性、子孫を生み育てるといった、これまで生の前提となってきた諸概念が意味を失い、生きることに混乱する。



- 現代社会の「病理」（例えば、生涯未婚率の上昇、引きこもり、うつ、孤独死を含む）は、こうした〈自己完結社会〉の成立と無関係ではないのではないだろうか？

## 2. 〈自己完結社会〉という視点

### □ ポストヒューマン時代をめぐる逆説

#### □ ポストヒューマンになること＝〈自己完結社会〉の進展は、 「自由」と「平等」を拡大させる

→ ポストヒューマンになることは、難病や障碍に苦しむ多くの人々の「自由」と「平等」を拡大させる。

→ ポストヒューマンになることは、老いに苦しむ多くの高齢者やその家族の「自由」と「平等」を拡大させる。

→ ポストヒューマンになることは、差別や偏見に苦しむ人々の「自由」と「平等」を拡大させる。

→ ポストヒューマンになることは、生物学的な身体やその差異がもたらす、あらゆる桎梏に苦しむ人々の「自由」と「平等」を拡大させる。

## 2. 〈自己完結社会〉という視点

### □ ポストヒューマン時代をめぐる逆説

□ ポストヒューマンになること = 〈自己完結社会〉の進展は、「自己決定」と「自己実現」を拡大させる

→ ポストヒューマンになることは、臭い、汚い、痛い、眠い、疲れる、老いるといった生物学的な不条理を取り除き、人々の「自己決定」と「自己実現」の機会を拡大させる。

→ ポストヒューマンになることは、容姿や性格を含む「生まれつき」の不条理を取り除き、人々の「自己決定」と「自己実現」の機会を拡大させる。

→ ポストヒューマンになることは、気に入らない相手と無理して関わらねばならない不条理を取り除き、人々の「自己決定」と「自己実現」の機会を拡大させる。

## 2. 〈自己完結社会〉という視点

### □ ポストヒューマン時代をめぐる逆説

- もしも「自由」や「平等」、「自己決定」や「自己実現」がわれわれの望む人間の理想であるとするなら、人間がポストヒューマンな存在になること＝〈自己完結社会〉の到来は、むしろ望ましいことであるということになる。
- このことは、ポストヒューマン比＝〈自己完結社会〉を望んでいるのが、他ならないわれわれ自身であるという側面を浮き彫りにする。
- 想定された理想はむしろ「実現」に向かっている。それでもかえってわれわれの「苦しみ」は深まっていくのはなぜなのか？

□ この矛盾を見きわめるためには、〈自己完結社会〉の背景で、それを促進させてきた「世界観＝人間観」に着目しなければならない。

### 3. ポストヒューマン時代と、 「世界観＝人間観」をめぐる問題

### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

#### □ 〈無限の生〉の「世界観＝人間観」とは何か

##### □ 〈無限の生〉の「世界観＝人間観」：

→ 人間のあるべき姿とは「意のままになる生」の実現であり、人間の使命とは「意のままにならない生」の現実を改変し、克服していくことである

→ この「世界観＝人間観」こそが〈自己完結社会〉を促進させている

□ 確かに人間は原始の時代から世界に介入し、世界を改変してきた。しかしその根底にある「世界観＝人間観」は多くの場合「意のままにならない世界」を前提に、いかに「より良く生きる」かを志向するものであった（→ 仏教における「無常」、古典的なキリスト教における「罪」）。

□ 〈無限の生〉はきわめて特殊な「世界観＝人間観」であり、その起原はルネッサンス期のキリスト教的な「世界観＝人間観」にある。

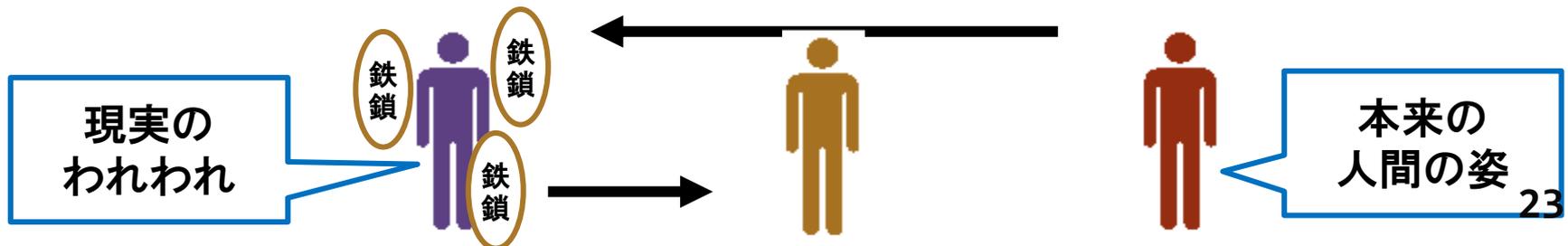
□ そして実は、この「世界観＝人間観」は、今日の人文科学的知／哲学的知が依拠してきた西洋近代哲学に深く根ざしてきたものでもある。 22

### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

#### □ 西洋近代哲学に見られる「約束された本来性」という装置

□ 「人間は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている」（『社会契約論』J・J・ルソー）

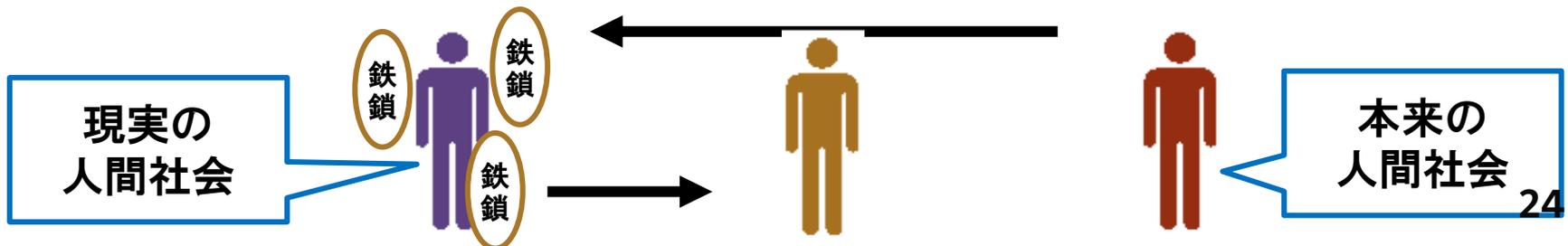
- ルソーの有名な言葉には、実は〈無限の生〉の「世界観＝人間観」が最も簡潔にかつ的確に明文化されてている。
- この世界には、未だ実現していないが「あるべき人間」＝「本来の人間」が存在する。人間は自らを縛る「鉄鎖」を克服することによって、その「あるべき（本来の）人間」に到達することができる。→ 「約束された本来性」



### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

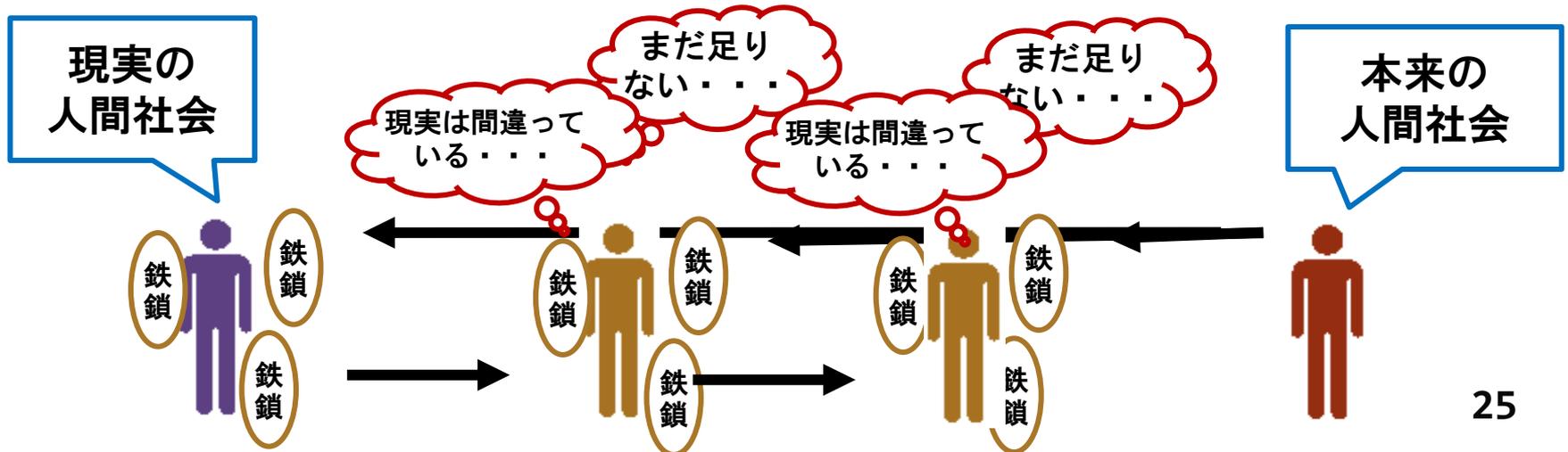
- 西洋近代哲学に見られる「約束された本来性」という装置
  - 「本来の人間」を誰ひとり体験したことはなく、その具体的な形は不明であるにもかかわらず、それは確実に存在するという確信だけがある。
  - こうした“前提”は、カント、ヘーゲル、マルクスなど、西洋近代哲学の後継者たちに着実に引き継がれてきた。

- 根底を成す思考スタイル → 「あるべき（本来の）人間（社会）」という理念から出発して、理念と異なる現実の人間（社会）を、理念に合致するよう変革する。
- 「意のままになる生」を実現していく人類の物語という意味において、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」を体現。



### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

- 「現実を否定する理想」は「無間地獄」をもたらす
  - 「あるべき（本来の）人間（社会）」という理念から出発して、理念と異なる現実の人間（社会）を理念に合致するよう変革する。
    - 理想の形態として「現実を否定する理想」と言える。
  - 「現実を否定する理想」は、人間社会を変革させるが、現実には絶対に理念と完全に一致することはない。そのため半永久的に不完全な現実を否定し続けなければならない。→ 「無間地獄」



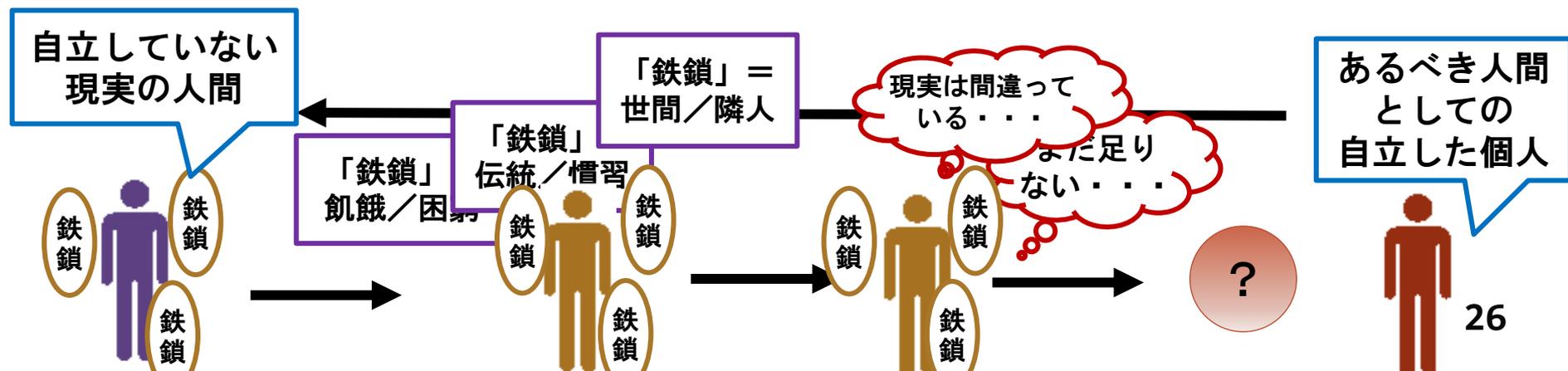
# 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

## □ 「無間地獄」の具体例としての「個人の自立」

### □ 「自立した個人」の理想

→ われわれは外的な権威や権力に流されることなく、自ら思考し、自ら判断できる主体とならなければならない。そのためには、個人を抑圧する外力から個人が解放されなければならない。

- 100年前の生活を振り返れば、われわれはすでに飢餓、困窮、伝統、慣習、世間、隣人などの外力から一定程度解放され「自立した個人」を実現している。しかし未だにわれわれは、「自立していない個人」が問題であるという。どこまでいけば「終わる」のか？



### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

- 近代的価値理念の多くは、「実現」されてきた
  - われわれは、目の前の“不自由”、“不平等”、“非自律”、“非共生”にばかり目を奪われているが、われわれは〈社会的装置〉の〈ユーザー〉となり「不介入の倫理」を行使することによって、近代的価値理念の多くを「実現」してきた側面がある。

#### □ 〈ユーザー〉としての「自由」

→ 〈社会的装置〉に接続する生活を通じて、住む場所、従事すべき仕事、つきあう人間等を一定程度「自己決定」することができる。

#### □ 〈ユーザー〉としての「平等」

→ 〈社会的装置〉の発達を通じて、所与の身体能力や属性による差異が縮小され、多くの人々が同じ〈ユーザー〉として対等に関わることができる。

#### □ 〈ユーザー〉としての「自律」

→ 自己責任を伴うが、基本的には自ら考え、自ら価値づけ、自ら判断することが承認される。他者がその内実に介入しないことが規範となる。

### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

□ 近代的価値理念の多くは、「実現」されてきた

□ 〈ユーザー〉としての「共生」

→ 少なくとも「リアル世界」においては、人々は互いに干渉を避けるため、あらゆる人間の差異は相対化される。人々は直接的には不介入だが、〈社会的装置〉を媒介して「緩やかな連帯」を実現する。

- これが「真の〇〇」ではない、と呼ぶのは容易い。
- しかし〈社会的装置〉と「不介入の倫理」によって、着実にある種の「自由」、「平等」、「自律」、「共生」は確かに実現してきた。
- それは確かに近代的知識人が思い描いていたような“バラ色”の姿ではなかったが、これが「理想」を現実世界に具現化した本当の姿だったのではないか。
- むしろ、よりいっそうの“自由”、“平等”、“自律”、“共生”を求めるからこそ、〈自己完結社会〉が進展し、〈生の自己完結化〉、〈生の脱身体化〉が進行する。

### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

- “個人”の物語へと拡張された〈無限の生〉の「世界観＝人間観」
  - 自明視される、生のあり方としての「自己決定」と生の目的としての「自己実現」。
  - 〈無限の生〉＝「意のままになる生」こそが人間的生のあるべき形という信念（“人類”の物語から“個人”の物語へ）。
  - 「かけがえのないこの私」から「こうでなければならない私」へ。かえって「意のままになる生」（「自己決定」、「自己実現」）を妨害したり、阻むものの存在はすべて「不合理」、「不当」、「異常」だと感じられるようになる。

#### □ 現代的な「生きづらさ」の背景にあるもの

→ 〈無限の生〉＝「現実を否定する理想」は、「無間地獄」をもたらすが、ここでは「こうでなければならない私」の理想と、人間である限り人生には「意のままにならない」ものがあるという現実との矛盾となって、人々を苦しめる。→ 自己肯定感の低下

### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

#### □ 「意のままにならない生」の制圧こそが未来を拓く？

#### □ 現代的な「生きづらさ」の背景にあるもの

→ 〈無限の生〉＝「現実を否定する理想」は、「無間地獄」をもたらすが、ここでは「こうでなければならない私」の理想と、人間である限り人生には「意のままにならない」ものがあるという現実との矛盾となって、人々を苦しめる。→ 自己肯定感の低下

- われわれの苦しみが〈無限の生〉の理想と、残された「意のままにならない生」の現実にあるとするなら、科学技術によって、「意のままにならない生」を完全に制圧すれば良い
- 高度に自動化された「持続可能な」〈社会的装置〉を構築するとともに、人体改造、アンドロイド、バーチャル化などによって「意のままにならない身体」を克服し、「意のままにならない他者」と生きる宿命を克服。
- そうすれば「こうでなければならない私」と現実の「この私」が一致する究極の「意のままになる生」が実現。

### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

- 「脳人間」の世界——〈無限の生〉の「ユートピア」①
  - すべての必要物はドローンで自宅に届けてもらい、会社にはネットを介してアバターで出勤する。自室を一步も出ることなく、一生が完結する社会。そうすると身体を持つ必要がない。いっそ脳だけになり、直接バーチャル世界にアクセスすれば、臭い、汚い身体のメンテナンスから解放される。「意のままになる他者」を演じてくれるアンドロイドからバーチャル世界でのバーチャル人格との生活へ。すべてが「意のままになる」世界の実現。

情報システム

#### □ 「脳人間」の最期

- 「脳人間」は、最初でこそ「無限の生」を楽しむだろうが、おそらく早々に飽きてしまい、ついには自ら電源を切るのではないか？
- ただし「脳人間」でさえ、脳という「鉄鎖」に縛られている。真の意味での「自由」と「平等」は、人間が完全に身体を捨てた「思念体（精神体）」になったときにはじめて実現する。

### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

- 「自殺の権利」——〈無限の生〉の「ユートピア」②
  - → 難病患者の安楽死が認められているオランダでは、近年難病でなくてもQoL (quality of life) が低下したと感じる高齢者の自殺の権利を認めるべきだとの声が上がっている。
  - → 自己完結人間の世界観においては、自身の死が「意のままにならない」ことは不合理であり、自身の死のコントロールは当然の権利として想起される。

#### □ 自殺が公認となる社会

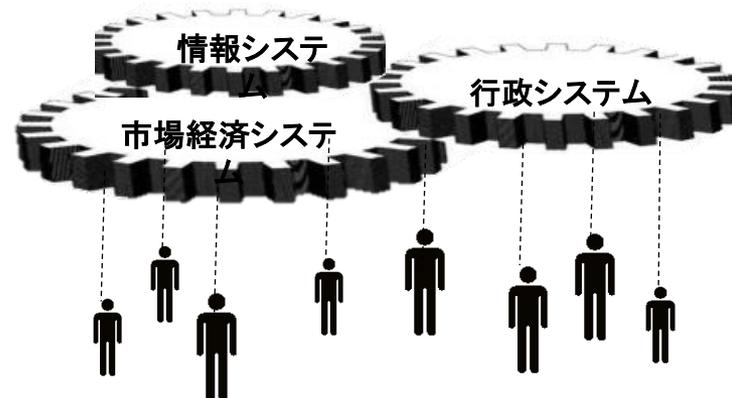
→ 例えば自殺のための公的な施設の出現。生きたければ生き、死を望めば一切の苦痛がなく、誰にも迷惑をかけることなく、気持ちよく死ぬことが可能。

#### □ 人生は個人の所有物であり、「意のままに」コントロール可能であるべきであるという信念の行きつく先。

### 3. ポストヒューマン時代と、「世界観＝人間観」をめぐる問題

#### □ 〈無限の生〉のアポリア

- → ここから見えてくるのは、究極の〈無限の生〉、真の意味での「解放」の理想が実現するためには、人間が人間であることを捨て去らなければならないというアポリア。
- → しかし人類はその道を選択するかもしれない。誰も〈社会的装置〉から「降りる」ことは望んでいないし、よりいっそうの「意のままになる生」（「解放」、「自己決定」、「自己実現」、「意のままになる身体」、「意のままになる他者」）を求めている。
- → だが、はたしてそこに「人間が生きること」の“意味”や“救い”はあるのだろうか。



## 4. 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」という視座

## 4. 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」という視座

### □ 〈有限の生〉とは何か

#### □ 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」：

→ 人間には、人間である限り逃れることのできない何ものが存在する。

→ 「意のままにならない生」の現実に取り憑かれ、それを一度肯定したうえで、現実の先にある自らの「より良き生」とはなにかを希求する「世界観＝人間観」

- 〈無限の生〉が“破局”を導くのであれば、われわれはこの〈有限の生〉から出発する以外にない。

## 4. 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」という視座

### □ 〈有限の生〉とその諸原則

#### □ 第一原則「生物存在の原則」

→ 人間は人間である限り、生存に不可欠な生理的欲求、あるいは身体的老い、病、そして生物学的な死から逃れることができないこと。

#### □ 第二原則「生受の条件の原則」

→ 人間は人間である限り、生を受ける時代、場所、与えられる身体、親族、帰属する社会集団などを選択することができないこと。

#### □ 第三原則「意のままにならない他者の原則」

→ 人間は人間である限り「意のままにならない他者」との関係性の負担を引き受けなければならず、それは自身が望んでいるかどうか、納得しているかどうかとは基本的には無関係であること。

## 4. 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」という視座

### □ 〈有限の生〉とその諸原則

#### □ 第四原則「素朴な悪とわざわいの原則」

→ 人間は人間である限り「情念」や「悪意」、「不誠実」がもたらすわざわいに直面し、それに対処することが求められるということ。

#### □ 第五原則「不確実な未来の原則」

→ 人間は人間である限り、「永遠で絶対的なもの」が存在しない現実のなかで、「より良き生」のあり方について模索し続けなければならないこと。

- 〈無限の生〉の「理想」は、このすべての原則に抗い、人間が解放されることを目指してきた。しかし、その「無間地獄」からこそ、われわれは“解放”されねばならないのではないか。

## 4. 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」という視座

### □ 〈有限の生〉にともに生きる思想の必要性

#### □ 人生の意味と〈有限の生〉

→ 人間は、自らの生に意味を見いだすことで生きていく。思い通りにならない他者だからこそ、何かを分かち合えたときに人は喜びを感じる。なかなか到達できない目標だからこそ、目標を達成することに意欲が芽生え、達成できたときに喜びを感じる。人間は必ず死ぬ運命にあるからこそ、子孫に何かを託そうとする・・・。

□ われわれが「ポストヒューマン時代」を生きるからこそ、そうした一見自明のような観点が、思想として骨肉化されていく必要がある。〈有限の生〉の諸条件を踏まえたうえでの、人間の生の意味、そして「意のままにならない」生の現実を肯定し（＝〈世界了解〉）、人々を勇気づける「世界観＝人間観」の成熟が求められている。

## 4. 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」という視座

### □ 〈有限の生〉をめぐるいくつかの問い

□ Q 1 : 近代哲学を〈無限の生〉＝「意のままになる生」の思想として総括するが、〈有限の生〉＝「意のままにならない生」に向き合った思想もある。

□ A 1 : 確かに近代哲学をざっくりと〈無限の生〉とまとめてしまうのは大雑把な整理と言えるかもしれない。  
→ 近代を生きた哲学者も人間の現実を生きていたので、そこには確かに〈有限の生〉への言及が含まれていた部分もあっただろう。その意味では、実際には細かい思想的な研究が求められる。

→ とはいえ、近代思想を振り返ると、カントの人倫、ヘーゲルの絶対精神、マルクスのユートピア思想など、西洋近代哲学は、大局的には明らかに〈無限の生〉を体現しているように見えるし、西洋思想はその系譜を明らかに継承している。

## 4. 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」という視座

### □ 〈有限の生〉をめぐるいくつかの問い

- Q2：「自己選択」や「自己実現」の拡大がかえって人々の自己肯定感を下げているというが、未だに「自己選択」や「自己実現」できない人々がいる。そうした人々の存在はどうするのか。  
（同様の問いとして、未だ最低限の「自由」や「平等」を享受できない人々がいる）。

- A2：確かに「一定の人々が享受できている何ものかを、享受できていない人間がいる」という問題は、対応すべき重要な問題。  
→ とはいえ、それはあくまで制度論的な問題であって、本論が問いたいのは、むしろ制度を超えた次元の問題。  
→ 換言すると、「一定の人々が享受できている何ものを多くの人間が享受できる」ようになって、ここで提起した問題は解決しない。

（ex. 「先進国の人々が享受している物質的な豊かさを享受できない人々がいる」という問題と、「エコロジカル・フットプリントが地球1個分を遙かに超えている」という問題は別問題）

## 4. 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」という視座

### □ 〈有限の生〉をめぐるいくつかの問い

- Q3：理念を掲げて変革しようとすることを「現実を否定する理想」と批判するが、例えば「失業をなくしたい」と考えて世の中と格闘することには意味がないことになるのか。  
(同様の問いとして、資本主義の変革や差別のない社会を希求など)

- A3：この議論では、「あるべき理念」から出発する理想を「現実を否定する理想」、現実から出発する理想の形を「現実に寄り添う理想」と呼んで区別している。

→ 失業の問題で言うなら、「一切の失業が存在しない世界」があるべき社会なので、「失業が存在している現実社会は間違っている」という発想は〈無限の生〉＝「現実を否定する理想」に近い。

→ 逆に「仕事がなく困っている人がいることを、皆でどう解決していけるか一緒に考えよう」というのは、現実から出発する「現実に寄り添う理想」になる。

→ 理想通りにならない現実を否定してもがき苦しむことと、現実から出発して、現実と格闘していくことで苦しむこととは、人間学的には意味がまったく異なることが重要。

# 4. 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」という視座

## □ 欲望論の限界

### □ 欲望論として見たポストヒューマン時代

→ 人間の持つ底知れぬ欲望が環境問題を引き起こしたように、とどまることのない欲望がポストヒューマン時代をもたらした。制止できぬ欲が人間いある限り、こうした問題は避けよう（解決しよう）がない。

→ しかし、人を愛したいという感情も、より良く生きたいという人々の願いも、ある面では人間の欲求である。

→ 近代の夢だった「自由」や「平等」も、現代の夢だった「自己決定」や「自己実現」も、矛盾を含むとは言え、ひとつの時代を生きた人々の願いが込められている。それらをまとめて「制御の効かない欲望」ととらえてしまうと、人間存在の多様な側面が見えなくなってしまう。

□ 人間には欲望があるが、その欲望は個人的なものから類的なもの、時代や環境によってさまざまな形を取る。重要なことは、人々の感情や欲求に意味や枠組みを与えている「世界観＝人間観」をどう考えるのかということ。

# 4. 〈有限の生〉の「世界観＝人間観」という視座

## □ 〈有限の生〉における人間的生の諸側面

### □ 〈有限の生〉における「生」

→ この私の「所有物」としての生ではなく、過去世代から未来世代へと続く〈存在の連なり〉のなかで、ひとつの時代をともに生きる人々とともに何かを託され、託しながら、「より良く生きる」ために、ひとりひとりが自らの現実と格闘すること（「私」＝個でも全体でもない）。

### □ 〈有限の生〉における「死」

→ 与えられた「意のままにならない生」を終えること。一人の人間が行った何事かが良かったのか、悪かったのかは誰にも分からない。それでも、良くも悪くも、人間は生きる限り世界に何らかの痕跡を残し、それは自らの死後も、人々から忘れ去られた後も、〈存在の連なり〉のなかで生き続ける。

### □ 〈有限の生〉における「理想」

→ 現実を否定するユートピアではなく、「より良く生きたい」と願い、現実と格闘する人々を勇気づけ、その手向けとなる意味や言葉。

### □ 〈有限の生〉における「責任」

→ 理性的な主体による普遍的正義への応答ではなく、移りゆく時代の正しさ、「意のままにならない生」を生きる残酷さのなかで、何かを選択してきたこと、何かを選択してこなかった（できなかった）ことへのその人なりのけじめの付け方。

□ 世界とは何か、人間とは何か、生きるとは何かという根本的な問題に対するわれわれの向きあい方を変えていくということ。

# 5. ディスカッション

# 0. 本ワークショップの目的（問題意識）

- 本企画では、シンポジウムで行った問題提起をさらに発展させ、ここから浮上してくる哲学／思想的諸問題について議論を掘り下げてみたい。

- **第一の論点：人間の未来について**  
（コメンテーター：熊坂元大（徳島大学））

- シンポジウムでは、R・カーツワイルによる「特異点」概念、およびY・ハラリによる「無用者階級」概念（「最適解」を導くAIの発達が、人体改造の恩恵を受けた超人たちと、技術の恩恵を受けられず、社会的に何ひとつ期待されない大多数という極度の格差社会を生む）について取りあげてきた。
- ここでは、両概念に加えて、究極の自己決定と自己実現を希求する未来として、企画者から「脳人間」の概念（身体を捨てて脳だけになった人間がバーチャル世界で生活する）、「自殺の権利」などについても言及し、人間の未来について考察する。

# 0. 本ワークショップの目的（問題意識）

- 本企画では、シンポジウムで行った問題提起をさらに発展させ、ここから浮上してくる哲学／思想的諸問題について議論を掘り下げてみたい。
  - **第二の論点：〈自己完結社会〉について**  
（コメンテーター：竹中信介（道徳科学研究所））

- 企画者は「ポストヒューマン時代」を読み解く一つの視点として、〈自己完結社会〉（高度な社会システムに人々が深く依存することによって、生身の他者と関わっていく必然性、生身の身体とともに生きる必然性を失っていく社会のこと）について言及した。
- 企画者はその兆候がインターネットなどを通じてすでに現代社会に現れていること、また、この問題が現代の生きづらさ、引きこもり、自己肯定感の低下などといった心身障害と密接に関わっていると推察しているが、果たして人類は「自己完結」しているのか、あるいは「自己完結」を選択するのか。

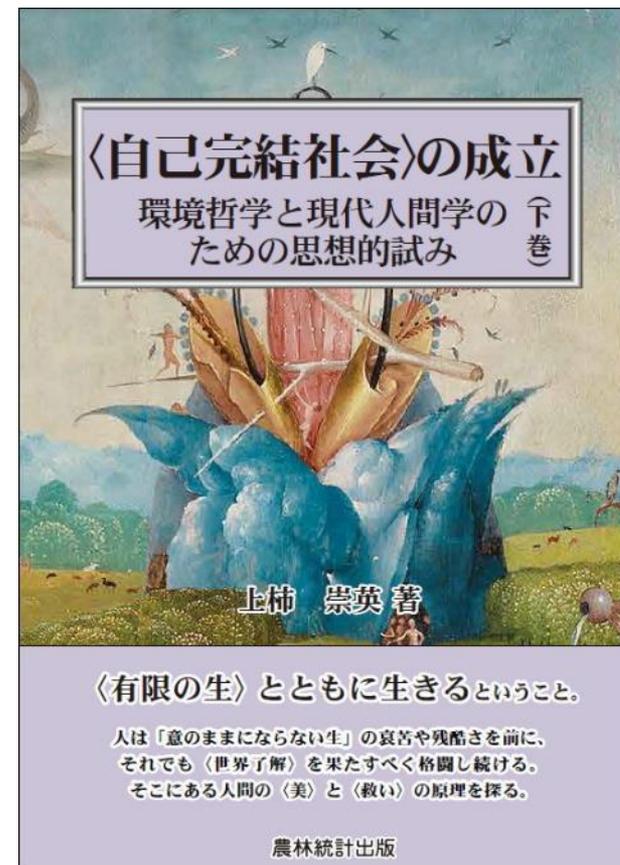
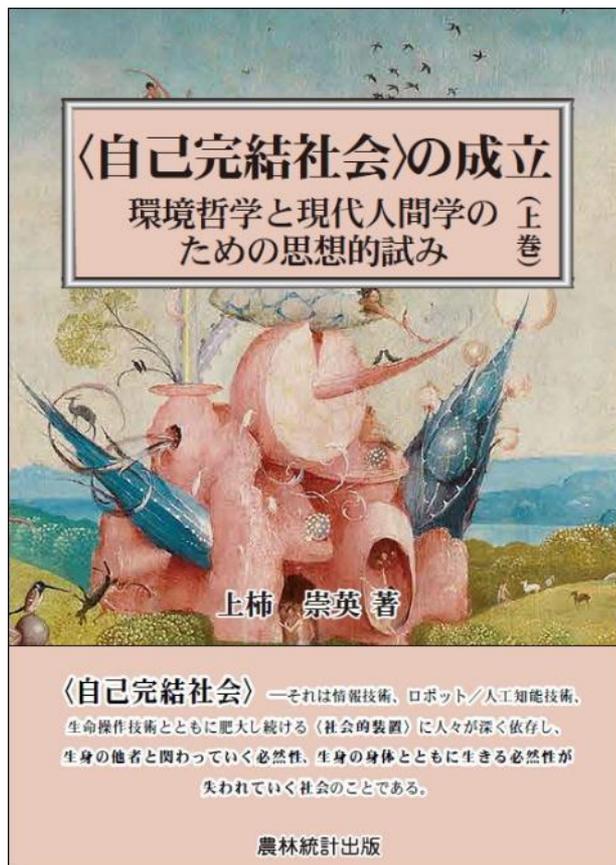
# 0. 本ワークショップの目的（問題意識）

- 本企画では、シンポジウムで行った問題提起をさらに発展させ、ここから浮上してくる哲学／思想的諸問題について議論を掘り下げてみたい。
  - **第三の論点：〈無限の生〉の「世界観＝人間観」について**  
（コメンテーター：亀山純生（東京農工大学名誉教授））

- 「ポストヒューマン時代」の矛盾を読み解く手がかりとして、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」について言及した。〈無限の生〉とは「意のままになる生」のことを指し、その「世界観＝人間観」のもとでは、「意のままにならない生」の現実を克服し、それをあるべき理念に相応しく改変していくことが、人間の使命であると理解される。
- ここでは、こうした前提が、西洋近代思想にきわめて深く内在していること、またそうした「現実を否定する理想」のもとで、自由で、平等で、共生の実現した「あるべき人間（社会）」を希求することが、必然的にわれわれを「ポストヒューマンな存在」になるべく要請するという矛盾について、さらなる考察を行っていく。

# 参考文献

- 上柿崇英『〈自己完結社会〉の成立——環境哲学と現代人間学のための思想的試み（上巻・下巻）』農林統計出版社。



# 参考文献

- 石黒浩（2015）『アンドロイドは人間になれるか』文藝春秋
- [上柿崇英（2021）『〈自己完結社会〉の成立——環境哲学と現代人間学のための思想的試み（上巻）』農林統計出版社。](#)
- [上柿崇英（2021）『〈自己完結社会〉の成立——環境哲学と現代人間学のための思想的試み（下巻）』農林統計出版社。](#)
- NHK「ゲノム編集」取材班（2016）『ゲノム編集の衝撃「神の領域」に迫るテクノロジー』NHK出版
- NHKスペシャル「NEXT WORLD」制作班（2015）『NEXT WORLD—未来を生きるためのハンドブック』NHK出版
- 梶谷懐／高口康太（2019）『幸福な監視国家・中国』NHK出版新書
- 久木田水生／神崎宣次／佐々木拓（2017）『ロボットからの倫理学入門』名古屋大学出版会
- 須田桃子（2018）『合成生物学の衝撃』文芸春秋
- 中嶋秀朗（2018）『ロボット--それは人類の敵か、味方か—日本復活のカギを握る、ロボティクスのすべて』ダイヤモンド社
- 増田敬祐（2020）「存在の耐えきれない重さ—環境における他律の危機について」（『現代人間学・人間存在論研究』大阪府立大学環境哲学・人間学研究所現代人間学・人間存在論研究部会第4号 pp.313-378）
- 松尾豊（2015）『人工知能は人間を超えるか ディープラーニングの先にあるもの』角川EPUB選書
- 山本卓（2020）『ゲノム編集とは何か—「DNAのハサミ」クリスパーで生命科学はどう変わるのか』講談社
- 吉田健彦（2020）「波打ち際の大聖堂—計算に引き寄せられる世界のメディア論」（『現代人間学・人間存在論研究』大阪府立大学環境哲学・人間学研究所現代人間学・人間存在論研究部会第4号 pp.379-443）
- [吉田健彦（2021）『メディオーム—ポストヒューマンのメディア論』共和国](#)

# 参考文献

- G・オーウェル (1972) 『1984年』新庄哲夫訳、ハヤカワ文庫
- C・オニール (2018) 『あなたを支配し、社会を破壊する、AI・ビッグデータの罠』久保尚子訳、インターシフト
- R・カーツワイル (2007) 『ポストヒューマン誕生』井上健監訳、ほか訳、NHK出版 (Kurzweil, R. 2005. *The Singularity is Near: When Humans Transcend Biology*. Viking.)
- J=G・ガナシア (2019) 『虚妄のAI神話—「シンギュラリティ」を葬り去る』ハヤカワ・ノンフィクション文庫
- I・カント (1976) 『道徳形而上学原論』篠田英雄訳、岩波文庫
- S・ケーガン (2019) 『「死」とは何か』柴田裕之訳、文響社
- P・スコット=モーガン (2021) 『NEO HUMAN—究極の自由を得る未来』藤田美菜子訳、東洋経済新報社
- Y・ハラリ (2018) 『ホモ・デウス (下) —テクノロジーとサピエンスの未来』、柴田裕之訳、河出書房新社。(Harari, Y. N. 2017. *HOMO DEUS: A Brief History of Tomorrow*, HarperCollins.)
- R・ブライドッティ (2019) 『ポストヒューマン』門林岳史監訳、ほか訳、フィルムアート社
- E・ヘロルド (2017) 『超人類の時代へ—今、医療テクノロジーの最先端で』佐藤やえ訳、ディスカヴァー・トゥエンティワン
- J・J・ルソー (2005) 『人間不平等起原論／社会契約論』小林善彦／井上幸治訳、中公クラシックス
- V・マイヤー=ショーンベルガー／K・クキエ (2013) 『ビッグデータの正体—情報の産業革命がすべてを変える』斎藤栄一郎訳、講談社
- M. Gladden (2018) A Typology of Posthumanism: A Framework for Differentiating Analytic, Synthetic, Theoretical, and Practical Posthumanisms, in *Sapient Circuits and Digitalized Flesh: The Organization as Locus of Technological Posthumanization* (2 ed.), Defragmenter Media, pp.31-91.

# 参考文献

ご静聴ありがとうございました